

編集/コンビニの会事務局  
連絡先/〒452-0807 名古屋市西区歌里町147番地  
TEL/FAX(052)505-6082(コンビニハウス)

障害をもつ人たちの地域生活を支援する

特定非営利活動法人  
コンビニの会

定価/150円  
昭和54年8月1日第三種郵便物承認

第147号



雨に濡れるマスク姿の石地藏たち (京都市・六角堂 2020年10月)

マスク地藏に願いをこめて

考現学採集者 佐宗 圭子

ある雨の日にお寺を参拝したら、境内に石地藏がずらりと並んでいた。全部で百尊くらいあるだろうか。顔もいろいろ、形もいろいろ。立ち姿だけでなく、寝た姿、座った姿のお地藏さんもいて、それぞれの姿で行を修し、私たちを常にく守ってくれているのだという。特に小さな子供を守るという「わらべ地藏」は小さなわらべを抱いている。また、横に小さな牛が置かれ、ペット連れに見えるお地藏さんもいる。

よだれかけは定番の赤い布、頭には手編みの帽子。頭だけでなく台座の上部にも、石のかたちや大きさに合わせて編まれた帽子がのつかる。色とりどりで何ともおしゃれ。編んだ人の楽しさが伝わってくるようだ。そして目をひくのは可愛らしい手製のマスク。ひもの長さを上手に調節して、ていねいにつけられている。

(次頁へ)

世界をおおうコロナ禍のなか、日本中あちこちでマスク地蔵が出現した。「お地蔵さんは飛沫を飛ばさない」とか「石にウイルスは感染しない」とか「布マスクで空気中のウイルスは防げない」などという人は誰もいないだろう。かさ地蔵のように、寒そうだと思えば笠をかぶせ、悪いウイルスがいるというのならばマスクをつけ、コロナ退散と健康を願うのは自然に思える。

お地蔵さんたちが「密」とはいえ（笑）、少々過保護かなと思えるほどの気づかいと、きちんとした手仕事が見る者をほっこりさせてくれる。お地蔵さんもマスクの下で笑ってくれるに違いない。どうか、みんなを守ってくださいますように！



わらべ地蔵には  
手作りの小さなでんでん太鼓も！

### 雑記 ごまめの歯ざしり

#### 本の森へ

「書評家」を自称しているのでこちらでも本の話題を少々。今年のノーベル化学賞は「クリスパー・キャスナイン」と呼ばれる新しいゲノム編集技術を開発した二人の女性研究者に贈られた。狙った遺伝子をピンポイントで書き換える新技術は、遺伝子疾患治療の福音と目されている。詳しくは、受賞者の一人が書いた『クリスパー 究極の遺伝子編集技術の発見』（文藝春秋）を参照されたい。

私はこの大発見のことを、漫画家・弘兼憲史氏の取材の際に知った。弘兼氏は人気キャラクター「島耕作」の生みの親。とはいえもっぱらの関心事は在宅医療を含む高齢化問題だという。その延長で遺伝子技術の話が出たのだった。それから数年後、私は母を在宅で看取った。主治医は『なんともでたいご臨終』（小学館）の著者・小笠原文雄医師で、最後まで献身的にケアして頂いた。感謝の言葉もない。

それでもあれが母にとっての理想の死の迎え方だったのだろうかという思いはいまだにある。医療者の側もそれは同様のようで、その懊悩（おうのう）をつづつたのが小堀鷗一郎医師の『死を生きた人びと——訪問診療医と355人の患者』（みすず書房）。小堀医師は森鷗外の孫。食道がん手術の専門医だったが、定年後は訪問診療医となった。延命優先の現代医療に疑問を抱いたのが理由の一つだった。

その祖父・鷗外は、近代と前近代の医療のはざまに揺れた。短編『カズイスチカ』（新潮文庫『山椒大夫・高瀬舟』所収）は、蘭方医の父親と大学で最先端医療を学んだ息子との相克（そうこく）を描く掌編。いずれが優れているか。鷗外は答えを出してはいない。

たとえ画期的なゲノム編集技術が開発され、新たな医療の扉が開かれたとしても、人は命を前に悩み惑う。そんな時に私が頼るのはやはり書物だ。コロナ禍の今、読者諸兄姉も本の森を散策してみてはいかがだろう。

（支援者 中島 駆）



9月26日付の中日新聞に、養護学校で暴力的な指導が行われていたことを取り上げた記事が掲載された。記事には、被害を受けた元生徒が、今通っている施設職員にかみついたり、たたいたりすることがあり、施設の職員は、職員側の対応に問題があつてうまく関係が築けていないからだと考えていたが、過去の暴力的な指導も要因となつて周囲の

者を怖がるようになっていたのかもしれないと書かれていた。

新聞記事の結びに、日本福祉大学の木全和巳教授が、暴力や威圧的な言動が被害者の人生に後々まで影響を与え、受けた傷の回復には傷つけられた期間の何倍もの時間と、丁寧な関わりが必要となることを指摘している。



この記事を読んだとき、障害福祉サービス利用者（以下、利用者）の傷つきに寄り添うことと、それに向き合う支援者側の傷つきについて考えさせられた。

近年、虐待防止に関する研修が盛んに行われるようになったが、そのなかで、アンガーマネジメントに関する研修も増えている。

アンガーマネジメントは、怒りや悲しみといった誰でも抱く感情を、適切にコントロールしながら問題解決を図るスキルである。

こうしたスキルは、アメリカで福祉労働者

等を対象に1970年代に確立されたが、日本の障害福祉施設では、新聞記事の施設職員のように、支援者側が自身の対応に問題があるのではないかとまず考え、支援者自身が感じた怒りや辛さを率直に相談しにくい雰囲気が存在しているように思う。

支援者が虐待加害者とならないようにしていくことは当然だが、自分がこれまで出会ってきた支援者で、そうした悩みを抱えた人たちは虐待という加害ではなく、自身が福祉に携わる支援者にふさわしくないのではないかと自分自身を責めていた。

それが退職につながることもあり、エゼル福祉会でも、支援者の育成、定着の観点から重要なテーマだと認識している。

利用者の言動で支援者が傷つくことは事実として存在する。そのような痛みに対して、若い支援者ほど、支援者なのだから嫌だと感じてはいけない、支援者なのだから利用者の



言動を否定してはいけない、受け入れなければいけないと、自身の痛みを抑え込んで葛藤している。

このテーマを考えるために、『支援者として自分が傷ついた経験』について法人内でアンケートをとったところ、若手からベテラン様々な立場の支援者から体験が寄せられた。そのなかでも、ある学生アルバイトヘルパーの「告白」が印象深かったため、ヘルパーとして、職場としてどういった整理が必要か先述の木全先生を交えて意見交流を行った。※感染症対策のためZOOMを使用して意見交流を行いました。ヘルパーや利用者が特定されないよう一部内容を修正して記事にしています。



# 【参加者】（敬称略）

- 日本福祉大学 教授 木全和巳
- 生活支援部 現場総合主任 榊原
- 学生ヘルパー A

榊原

今回、学生ヘルパーのAさんが、ある利用者さんから、叩かれたり、怒鳴られ、辛いと感じていたことを知りました。

Aさんは、普段から誠実に介助を行ってくれていますが、「（利用者）と衝突したことを聞いて」大丈夫？辛くなかった？」と声をかけても、「大丈夫です、平気です」と言っ、自分から見ると少し背伸びをして無理をしているのではと思う場面がありました。

A

職員さんや他のヘルパーさんたちも自分と同じように辛いと思っているか

もしれないと思うと、自分だけ「辛い」なんて言えず、「大丈夫です」と答えていました。

叩かれたり、怒鳴られるようになったとき、利用者さんがイライラする理由も想像できたので、嫌だとは思いましたがなんとか受け止めようと思いました。

しかし、「他のヘルパーとやり方が違うからAはだめだ！」と強い口調で言われたり、「（私の年齢を知っているためか）年下だから間違ってる、違う」と介助方法を拒絶され、次第に八つ当たりされていくのではと感じるようになってきました。

年下だからだめ、年上の言うことは正しい、この利用者さんがそう考えるならと、その言葉を受け止めようとしたとき、自分は意見を言えない立場なのだ、

A

考えてはいけなさんだと思いました。そう考えると、その利用者さんというのがすごく辛くなっていました。自分の存在を否定されたように思えて。

正直ヘルパーを辞めたくまりました。利用者さんの気持ちを汲んで理解したい、利用者さんの気持ちや考えを否定したくない。でも次の勤務日があるのが嫌だと思ってしまう。職員さんに相談したとき、休んでも大丈夫だよと言っても、休んだことも、自分が必要とされていない、今まで頑張ってきたのにと様々な気持ちが出てきました。

本音を言えば今でもその利用者さんと話すのは辛いんです。自分は言われたこと、されたこと覚えているので。

ヘルパーだから我慢する、自分の意見を出し過ぎない、そう思っていたとき、

木全

別の利用者さんから、「ヘルパーだって同じ人間だよ」とふとしたときに言ってもらい楽になりました。

木全先生の新聞記事を読み、利用者さんからの「〇〇さんのいうことが正しい、お前は間違っている」という言葉も、もしかしたら、この利用者さんも過去にそういう言われ方をされて傷ついてきたのかもしれないと想像しました。

アンケートを読み、Aさんがとても正直に気持ちを綴っていると感じました。私が知ってる法人でも、辞めることを決めてから相談してくるケースが多い。

他の法人でも、グループホームやヘルパー派遣といった事業は、介助者の一人職場（介助者が個別に動くため、職員同士が顔を合わせる機会が少なく、現場に

A

おいて個人で判断して進めていかなければならない」となりやすく、悩みの相談や、情報共有が難しい。

定期的に事例検討や研修の場を持つことで、その擦り合わせを行っている法人もあるが、レポート準備の場面や、日々の記録の残し方とも関わってくるのが、自分が感じたことを書き残していく綴る力だと思う。

時間のあるときに「生活綴方」(※)について、みなさんで学んでみるのもいいと思う。でも、周りを信頼しないと本音を綴ることは難しいよね。

今回アンケートを書くときも、最初は書いていいか悩みました。こんなこと書いていいのだろうか、読んだ人がどう思うだろうかと。しかし、書いたことで、

A

抑え込んできた気持ちをだしてもいいとわかったことや、職員さんに知ってもらえたこともよかったです。

コロナ禍で今は難しいですが、エゼルで毎月開催してくれていたヘルパー学習会など、ヘルパー同士が何気ないことでも交流できる場があるといいなと思います。

木全

利用者さんも交えて、関わる者が集まって行うオープンダイアログというやり方もある。あらかじめ落としどころを用意せず、本音で自由に意見を出す。批判にならないようチームで関わる必要がある。障害種別によって難しい場合もあるが。

榊原

以前は、支援者同士がサービス提供の

前後で顔を合わせると、自然と支援に関する話が始まり、支援中に気付いたこと、嬉しかったこと、辛かったことを共有していました。また、びつしりと書かれた利用記録を読むと、こういうふうに感じたんだ、よく気付いたなあと感心させられたものでした。

しかし、昨今は働き方改革も始まって、勤務管理をより厳格に行う必要ができました。そうしたなかで、支援者同士が話し合うことや、感じたことを丁寧に綴る習慣を職場が意図的に設定していかなければ失われていってしまうと危惧しています。

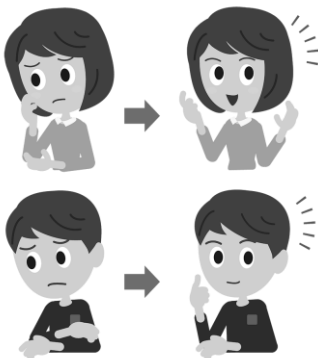
そうした配慮と、勤務の効率化のバランスをとりながら実践力のある支援者集団を目指したいと思います。そうした支援者こそ、自分の気持ちも大切になら

がら、相手の痛みに寄り添っていきける介助者になり得ると思います。

木全先生、貴重なお話をありがとうございました。

### ※「生活綴方」とは

生活者としての子どもや青年が、生活のなかで見聞きして、感じたことや、考えたことを事実にして具体的に自分自身の言葉で文章に表現すること、またはそのようにして生み出された作品。





ゝ は じ め に ゝ

娘の由紀子が亡くなって間もなく一年になります。

この間、由紀子を偲んで会報に記事をお寄せ下さいました皆様に心より御礼申し上げます。また、記事を通して「そうだったね…」と、由紀子を懐かしく思い出して下さった方々もいらしたと思います。皆様に愛された豊かな日々であったことに感謝致します。

追悼文の最終回となります今回の会報に

は、「もしもこちらコンビニハウス」と言う写真集に掲載された由紀子の「春の訪れ」と題した文章をお読み頂いて終了させて頂きます。

学生ボランティアや主婦など百名を超える市民が集まって船出したコンビニハウスでしたが、公的な支援を受けられない福祉活動はたちまち財政難に陥って崩壊の危機に瀕します。その当時（1995年）コンビニハウスに泊まりに来る障害のある人たちを撮影していた写真家の長谷川友子さんの提案で発行されたのが写真集「もしもこちらコンビニハウス」です。一冊二千円で販売されたこの写真集に掲載された由紀子の作文からは、運営費不足の暗さなど微塵も感じられず、期待に胸を膨らませた爽やかな笑顔が思い出されます。

更に読み進むと、障害のあるわが子をコンビニハウスに託せたことで訪れた束の間の

「普通の暮らし」を心から喜び、「有難う…：助かりました」と感想を寄せて下さったお母さんたちの嬉しさが伝わってきます。

（大川 美知子）

□ ■ □ ■ □ ■ □ ■ □

三月一日、利用会員登録受付開始の日。『コンビニハウス』の事務局の電話は、十時の受付開始時間を待つことなく鳴り始め、午前中の二時間、受話器を置く間もなかった。その一本一本が、そして『コンビニ』の活動を応援しようと集まってくれる人達一人一人が、私の不安を打ち消してくれる。

私は、一人暮らしを始めてから四年間、自立に向かって我武者羅に走り続けてきた。少しでも手を抜いて楽をしたら、この生活を続けることは出来ない、余裕のない厳しさはあったが、自分自身が生きているのだという実感があり、それは人間としての誇りにつながった。しかし、重度障害の友人達の生活は

違った。母親はヘトヘトになりながら子ども  
の介助をし、友人達は自分を人生の主人公と  
して認めてくれない社会や、一心同体の親子  
関係に疑問すら抱いていない。「知的・言語  
的にも障害がある重複障害者には、あなたの  
様な生活は出来ない」沢山の人達の前で自立  
について語る時、必ず言われるそんな言葉が  
胸に刺さった。『出来ない』ではなく、どの  
ような支援体制があれば『出来る』に変わる  
のかを考えたいと思った。

一昨年の夏、共に作業所作り運動をしてき  
た障害者の親や小規模作業所の職員を中心  
にして、『障害者の地域生活を考える会』（後  
に『コンビニの会』となる）が生まれた。レ  
スパイトサービスを始めたい、という母の話  
を聞かされた時、私はとても興奮していた。  
ずっと気に掛かっていたことが、ようやく何  
かの形になっていくのかと思うと、じっとし  
ていられたかった。毎月一回開かれる中村区

にある『やまびこ共同作業所』での学習会の  
メンバーは、各地域で重度重複障害者の為に  
無認可無補助からの施設作りを続けてきた  
人達ばかりで、その粘り強さと樂觀的な明る  
さへの信頼から発展の兆しを感じた。

『AJU』が私に教えてくれた事、その集  
団の中で養われてきた力を、『コンビニ』で  
発揮出来る事は、私の心をワクワクさせた。  
人は与えられる事によって、初めて他に提供  
する力を得るのだと思う。与えてくれた場所  
は『AJU』であり、提供する場合は『コンビ  
ニ』である。私を守り育ててくれた方々に、  
この四年間を振り返り心からお礼を言いた  
い。

今、『コンビニハウス』は、春の訪れを待  
ちながら、連日会議を開き、オーブンの準備  
に追われている。障害の重い友人達やその母  
親達が、安心した笑顔を見せてくれる日を夢  
見て…。

※レスパイトサービス・・・日頃介助にあ  
たっている人の所用（冠婚葬祭など）・療養・  
休養などのために、介助の必要な障害者など  
を一時的に引き受けるサービスのこと。

※コンビニの会・・・家族の介助負担を減  
らし、障害者・家族のより豊かな地域生活を  
二十四時間サポートするために、民間のレス  
パイトをする会。期間中の日常活動が継続で  
きるよう、施設・学校などへの送迎も引き受  
ける。現在はエゼル福祉会に業務移行してい  
る。



写真集「もしもしこちらコンビニハウス」



「家から行ったことのない居酒屋へ初めて連れていってもらってとても楽しかったし、お店のおじさんが私なんかの話をよく聞いてくれたりしてよかった」と、興奮して話してくれました。2日目も朝風呂に入ったことがないのに入れてもらい、幸せいっぱいという感じを受けました。(利用者の家族)

結婚して24年、初めて夫婦で旅行に行くことができました。一度ゆっくり行きたいと思っていましたが、なかなか機会がなく、今回、思い切ってコンビニハウスをお願いして、楽しい思い出ができました。娘も2人で旅行に行くことに賛成してくれて、コンビニハウスで待っていることも、「楽しいからいいよ」と言ってくれました。迎えに行くと、ニコニコととても嬉しそうにしていました。(利用者の家族)

### 夢よひろかれ

朝起きて大きくのびをして長い手足をニューとのばす手足がタンスにくっついてしまう狭い部屋でニコッと笑う娘。

服を着替えながら「クッククック」とまた思い出し笑いする娘に

「なにか楽しい夢見た…？」

「うん」

「お母さんと食事にでも行った夢かな…？」

ノーと首を横に振る

「そうか、友の家の楽しかった事…？」

ノーと首を横に振る

「あれ、コンビニで泊まったときの夢…？」

「ハイ…」と大きく返事して、またクッククック…。

重い障害をもって生まれて28年、娘の夢もだんだん広がってきました。

(利用者の家族)

一度言い出したらそれがかなうまでテコでも動かぬ娘  
時にはパニックを起こして泣きわめく娘  
車椅子の友達の面倒をよく見、よく気をつく娘  
SMAPをはじめジャニーズ大好き人間の娘  
親離れを望めば望むほど、母親べったりの娘  
焦らず、気長に、少しずつと我が身に言い聞かせるこの頃です。  
(利用者の家族)

当時のコンビニハウスを利用した  
利用者さんの親御さんの感想です♪



# 《活動状況》

## 9 月

- 3 日 社協 人材確保定着オンライン研修  
(大川・榊原)
- 8 日 事務局会議
- 9.10 日 名古屋特別支援学校より実習生  
(VOLO)
- 10 日 来春入社希望者試験・面接
- 10.18 日 防災会議
- 13 日 生活支援部主任会議
- 19 日 暮らしの場交流会 (木村)
- 19 日 通所部主任会議
- 22 日 通所祝日開所
- 22 日 事務局会議
- 24 日 通所親の会 研修会
- 24 日 名古屋特別支援学校より実習生  
(VOLO)
- 24 日 会報発送
- 30 日 全障研オンライン研修 (岩下)

## 10 月

- 2 日 会報会議
- 2 日 NPO理事会
- 7 日 名古屋特別支援学校より実習生  
(VOLO)
- 12 日 NPO臨時総会
- 13 日 理事会
- 18 日 就職フェア ウィンクあいち(榊原)
- 22 日 通所親の会
- 22 日 通所部主任会議
- 27 日 事務局会議



## コンビニハウス クリスマス会中止のお知らせ

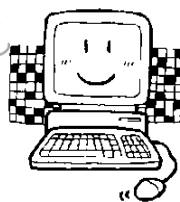
毎年開催しております恒例のクリスマス会ですが、  
新型コロナウイルスの感染が拡大している状況を鑑み  
誠に勝手ながら開催を中止させていただくこととなりました  
ご参加をご検討いただいていた皆様にはご迷惑をお掛けすることとなり  
大変申し訳ございません  
何卒ご理解のほど宜しくお願い申し上げます



問合せ先 052-505-6082  
コンビニハウス



## 事務局コーナー



## 「ご協力ありがとうございました」

9月～10月（敬称略・順不同）

## ★ ご寄付いただいた方々

(NPO 法人コンビニの会)

※会報購読料1万円以上お振込みの方

塩澤しのか 渡辺武司 竹内左枝

山上小枝子 渡辺治子 川島よしゑ

## ★ 物品寄付をいただいた方々

(コンビニハウス)

渡辺武司 伊藤夢子 木下楓奈子

石原優樹 宮川優子 石原まち

(VOLO)

塩澤しのか 小出あかり

渡辺美佳 上野知志 桑名妙子

井口結唯 長野資子 坪内美紀

(WILL)

中谷暢宏 丹羽恵子 佐藤慶太

## ★ 活動にご協力いただいた方々

(コンビニハウス)

石原正寅 辻本道子 榊原さち

藤本菜見 東原光江 鈴木千春

石原まち 寺西 剛 田村淳仁

伊藤翔磨 松本浩希 隅田 豊

村上梨央 吉岡将吾 酒井まみ子

田邊利徳 上野友志 瀬田美鈴

西川昇吾 清水柚衣

## ★ 会報発送ボランティア

吉田嘉子 丹羽正子

半田素子 佐藤美紀子

## ☆☆ 冬は「冷え」にご注意下さい ☆☆

朝晩の冷え込みを感じる時期になると、冬はすぐそこまでやってきました。  
身体が冷えてしまうとむくみや疲れやすいなどの症状が出てきます。

**3つの「クビ」**を冷やさない事が大切です。

**首・手首・足首**この部分は**皮膚が薄い**ので、

この3か所を温めてあげれば血行の流れが良くなります。

マフラー、ネックウォーマー、靴下、などで温めて下さい。



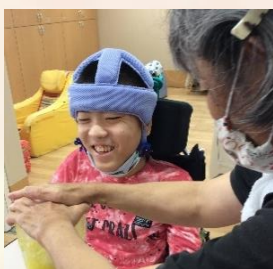
冷え対策には、生活習慣の見直しも必要です。バランスの良い食事、適度な運動、質の高い睡眠をも心がけましょう。



# 寄付のお願い！



VOLO では、利用者の方々が使用するフェイスタオルやバスタオル、雑巾などが不足しています。ご自宅に未使用のものがありましたら、是非ご寄付ください。よろしくお願いします！



もし、ご協力いただける場合は以下の方法をお願いします。

①TEL・mailでお問合せください。

②受け取り方法を確認します。

- ・郵送（送料はご負担願います）
- ・直接持ち込み など

エゼル福祉会 TEL : 052-508-7557 (担当 : 麻生)  
mail : ezeru-volo@ezeru.sakura.ne.jp

【銀行口座】三菱UFJ銀行 小田井支店 店番 238 (普) 口座番号 1440108

特定非営利活動法人 コンビニの会

【郵便振替口座】番号 00800-2-35190 コンビニの会

ご意見・ご質問・お問い合わせは下記までお寄せください。

障害のある人たちの地域生活を支援する

特定非営利活動法人

〒452-0807 名古屋市西区歌里町 147 番地

コンビニハウス Tel (052) 502-7731

Fax (052) 505-6082

コンビニの会

理事 宮川 優子

URL <http://ezeru.sakura.ne.jp/>

E-mail [convini@beach.ocn.ne.jp](mailto:convini@beach.ocn.ne.jp)

